



明治  
新撰

俳諧七百題

作  
加  
系  
序  
之  
心

下



新撰 俳諧七百題巻下

俳諧系岡先生補完 章整居竹史 孫

○紀行附名所春之部

芳野山

是川くときかり	是乃ゆり	世や双	貞徳
基乃秋ハ橋小所	去中ハ	華り	翁
寄生も所	はるる	乃山	学也
山橋一里か	そ	あ	原帝
重第小朝	了	於	去
死小	そ	あ	徳
就	守	の	徳
海	川	後	其

巻下

紀行附名所春之部

〇一



是神 多田ふせり 赤つし  
風あくと静 区たり 夜乃 是  
阿の雲ハ 陽は見ん 是より 日の山  
宗澄  
杉風  
寧太

嵐山

山君也 是ふさく ぬ吹か後  
是ふ 嘆中 之 是せ 何 之 就 古  
崇全  
曉齋

京都

是ふ 未々 都ハ 幕ノ 口 響り 引  
其角

唐の

是ふ 是ふ 命ハ かき 多 法 舞 臺  
其又

深 軋 心 法 道 果 下 竹 振 衣  
文旅  
若 軋 在 汲 下 六 益 其 鹿 口 香 候 主

多羽

是ふ 多 引 出 其 牛 也 多 羽 強 手  
暮巴

西疎

是ふ 乃 也 葉 小 牡丹 小 襟 小 綾  
迷室

飛雪山

帆 かけ 秋 小 多 小 是 小 嵐 小 明  
暮方  
上 慈 小 古 家 小 水 珠 生 小 花 香 山 如 美

上野

奉 小 小 之 春 道 小 多 多 揚 引  
暮方  
社 部 小 雲 井 揚 小 多 多 月 小 明  
全  
清 小 多 咲 上 野 小 多 多 老 門  
全  
道 小 多 多 揚 小 多 多 友 大 海  
全  
諸 切 小 多 多 揚 小 多 多 友 大 海  
全

人去下 櫻解集の月夜 五 全

日吉里

清之軒や片猪きき 清くし 漢遊

志村

丈夫草の風名る 志也 櫻軒 祇南

佃島

妻方きや佃の婦孫子 料理人 語長

風吹そふ 後き 浪の勢 可助 風會

箕輪

初らきや 聖のまゝ 女 岩 樺夕

禮の渡り

舞の 梅や 渡り 後し 古 一 漢

車馬止

むし 旅費よ 小道 寄り 山 桜 風 高

六分川

浪船や 水も さい 乃 宿 き 築 万 川

六分 中

茶 湯 小 湯 ね さい 湯 也 名 煙 り 岩 山

七里 漢

牛の 脊 小 酒 酌 り か け 地 名 八 枕 亦 権

桜川

旅 多 中 野 の 跡 生 の 法 寺 川 秀 寺

宮田

糸 初 也 鞆 小 手 隠 小 妻 結 色 有 産

深井

層 傍 深 井 小 器 小 器 迂 ぎ 亦 架

袖ヶ浦

浦の名の袖縫出を治平五 改上

若根山

管を於ふか帝たり 弱十 嶽 暮大

若妻産水を城四

以ふ来り妻を足知ぬ木の葉五 味伴

箱乃林

敷れり林や 柳乃 大 三 八 全 全

伴吹山

二月乃二つる 室 伴吹山 全

二見浦

燕の尾やふり分て 二見 深 柳居

菜名をわきし時

桑名浦口

賦了習と美帆は揚羽の糸蝶の如 水夕

控ふものさふうたぐ心 沙 牙 深 子代

四市産梅を名に

陽空や桑飯かしく波の上 水夕

烏帽子山

雲鳥や冬ハとあむく急む山 暮方

久別橋

矢別川霞の中を深き葎り 李喬

本野原

若柳や桑大君の料々木々 雲村

淡名

此山や 櫻ハ散きと香ハ残里 蝶夢

吉田巻川

冬椿や楳子跡も春の雪も木葉

後河路

暖か雪き一宮く山は久ら 凍瘁

今津山

山吹せ折々掛まゆ十葉子 枕隣

鞠子山

夕雲雀中々落きぬや鞠子山 五菱

梅宮策鞠子力有北とる汁 翁

浪平

荒浪平も様一本ハ若小 丹沙

加田

去春より始ハぬきく沙干系 一漢

多武峯

鶴寺の地子雪止くおけ多武の峯 興右

月の夜

もり上々白くお智北梅乃 吾 毎之

石切峠

付けかゝる養火消々雑子の聲 全

吉永院子南帝皇居の跡を尋す

古竿不雪の雪校む力陰 少 松隣

院

石水や院の東乃河をくめ 泉能

くはし

山法集下所也らく赤一臺 村 翁

雪外今霜かき此や炭の雪 全

雲雀よりよみ休らぬ跡の春  
行附名所夏之部  
○紀

源一

樽壺ふりあき暮や夏は月 翁

波岸ふり

城跡や古井の清水先六 人 今

最上川

五月雨を待つめく運し最上川 今

高野山

桑目ふり柳と足く涼しきよ 麦林

世空

舟の巻も返して黒木の舟居小 今

舟月夜袖あり也

木骨のまろくさくさ之夏大根 支考

木骨路

棧道や人の林生ぬ木下 翁 深更

箱根路

湖の中流水や夏木多 古 不夕

不條ふり

扇屋の紐かけを知る是の分 漁遠

滝流を煙々

夏料ふり牛八をさきや水車 斎墨

舟月夜舟田あり

滝沸や湖を望み 浮浪堂 波上

冥清水

湖の目と細めたる 清水うら 多疎

大井川

是々大井川 赤巻子月田 一嵐

穀生石

雲ふと石不厚たて 杜宇 空

子契浦

帆小流きや船へらのせ夕涼之 空

宇津山

鳥中も何れもぬ山流や水凡六鳥 乙流

左系古ととひ

古井戸と眼きふ出る星ころか 換樹

不破関

蜀小生うり流見しく不破の関 楚調

赤生島

寺々さねし海不生う竹生 寄 赤編

醒井

一口小春中のかろく清 水子 美必

西形名

兼子 漢子 甲斐さへふふて清 水子 涼涼

舟有哉の山あえり

口阿あうい反村かろく 初 揺 全

姨終山

祖父祖母も古村終る 田唄 子 涼涼

川中島古戦場

多々一燈不入新きても 田植 子 全

堤峨あて



押せしゆく枝折石刻光と号 全

客中

かゝる多系行方へ啼り川子 曉登

鶴見橋

五月四日鶴見橋ひさす橋をら 暮方

水室の日向峰あり

三寸の石ふたかり富士の雪 全

江乃島

鳴寺一波引かき歩後り 吐月

山中法

故のわらぬかきふたふた是れか 一髪

○紀行附名所秋之部

秋のうらふお出かき是れ

鳴り法や住後小横折小天の川 翁

鶴見石

此石の舟をわかき是れ秋の之巻 麦林

三井寺等覚院ふた遊上

乃月成

おせつる月の系色ふた秋の波 季吟

史料

懐松や州の縁ハ恙せふの言 麦界

澄海宮

晴下新雷の流り澄 秋島 陰六

大磯ふた

重田恙の縁うらふ後月 暮登

和舟ふた

恙るをこゝろをても之をぬけし  
涼風

一病に耽る事ありて山を

空しく家の中や女即ち  
枕を

志保浦

聖人の記もかくは去る月  
涼帝

羅漢寺

組いささの羅漢も何れに  
左

旅中

鶴の橋や伴豆多羅壇山  
暮志

○紀行附名所冬之部

竹生島

水多の浦なる水や舟生島  
虫林

淵田川

船形の是は赤き雪の  
乙流

味持山

持る雪を映る髪や枯尾  
琴待

文字の美

冥の石も文字の石とす  
舟七

箱根の山哉

月も日も水りや秋の  
冠子

熱田の海をこたり

星崎の雪を居るや啼  
翁

籠月台の山哉

籠八や山流吹く丸  
源帝

鞍の炭焼ひし

うき雪や返り後ハ  
波之

送中

傳り初也まゝに名し初了空の人 曉香

空乃その山不有り今

人より空不果作る難く今

と云

旅人と素名呼まむ 初時面 菊

拈て空く一燈雪の宿不帯火さく 程然

○送別春之部

初春を近江の人と物し女事家 菊

雲霧何處まを初も同じく今 世波

梅さく今二月斗より日さく 利牛

先生より一燈初結くあふ

ときさく

初初手袖初る初つ初山初る今 如梁

春の傳りや初る今

空の睦や初る今 素院

送別

兄送らん空も霧も初 兄 坂 空友

全

空の空たつる初別く今 哉人

一書注河甲空の玉塔の山

兄と空と初る

旅不初く壇踏る今 山初る今 源傳

浪空も今初る

春海空の筆乃先初る今 初 世披

一景初初空空今初る

梅もつとむ月日送き 窓より 全

半指亭送別

鏡持子胤もさきもぬき 送き 草子

言登京師の風俗ハワの風も

阿ふぬ執家の若達を送りて

夜寝ハ涙も宅よき 旅 吐月

志川の笑も名のもふ海も

代の旅ハ野風種の一助あり

き一丸ふ雪の勝し

短冊を撰らん 雪の築 手紙 空

淡路島送別

宵ふ了那の雪をわき 子 小 山

より 野嵐の志をか草を抄の

ハ旬の二雪を抄子 草り 草も深

高き首達を送りて

蝶名や都の雪の服ふらふ 全

碓山を送る

杖返すを近江詠や 担方 山

○送別夏之部

送別

雪の籠かきる 宿の方之わき 許六

翁の旅行せり 崎と送りて

前出に雲の白ひや 替の 目 利牛

四睡々武府ふり 等

牡丹ありて 七重は 寄き 枝

行旅の首達ふ

以てや宮中の衣冠は曇るも 後通

乙妙の御所

吾妻や秋は近江とおもひとも 山石

祖来うし 詠み新時時力を

契里守

死より生しと訪りや 郭公 治法

信子日影守時

散る村のうね安さよ 芥子方是 穢人

麦の穂や出枝も 程麦の中 地坂

浦風やむかす 蠟のけあき 恐水

柳居京小行時秋と契りて

散るときは又吹寄らむ 友屋あき 夏浪

陸奥へ散る人小

道々中村の松も雪非 是 暮古

吾も村を迷ふ

赤禪鉢十六文と首途の物 空

海へ流る二人舟中

首途く加茂の舟思へて 吐身

海に結九尾陸奥へ流る世迷

和葛物 和とあきさうハ散らぬ 因 全

老沙の縁何ぞ流る世迷

笑ふ七尺さきと 徳兄 飛 全

跡 全

故の法すも舟小き舟 舟松 八葉

船翁の杖のあきと 舟小葉田を巡

り 江戸ふさふさ 舟小葉田

渡き程巻海を慕ひ東海邊  
せむらも大愛史を送りて言  
猫の榮店も袂せ別の

浪音ふと一めを涼し葉の影 為山

京の東家あたひ杖と送るそ  
の道の程書葉ハ見古一節公

ハ夢阿らんお物たね難屋手

まそと稽し袂せ別とあけ

唐丁乃光りも阿らん 初 松魚 全

撲る船別

蝶の音も耳ふとと送るそ 一節 為山

○送別秋之部

秋風の聲も白旅多川 一節 豊林

又綴ハ秋ふとふ向ひ

ききき 一節の序ハ二人もふられけ全 芳芳

和ふと送るとと

秋の音もあけハ智原ハ一節 木園

侍留ハ人々酒席の清ふとと送る

菊湯も秋をたむと送る 一節 源瑞

葉もと送る 一節 源瑞

江を揚ハ別れ送る秋ハ一節 軍文

井元のり周井ハ物送と送る

冬売ハ中ふとと送る 一節 吐丹

○送別冬之部

萱蕪翁を送るハ物送

らハ水もあけハ物送 一節 杜玉

廿角ふわさる村

何たりと抄るまのたり冬の家 春号

後通ふ別り村

足巻るまの抄人室し一と部山 智月

さよと二人の海平 空乃 松 葉人

冠子故ゆふ抄るを

らら登佛し津幣や尾端のふさき 法唄

抄 別

法分せ抄も葉落令抄 七し 院屋

○留別春之部

乃春や多峰 真の月ハ ぬき 菊

友ハ真たり我ハ抄る

葉並抄抄くとまるとのふさき葉 麦林

写の抄しけりふ

志らふまや抄る抄も一と抄りぬ 大考

葉葉山ふ文戒しを抄る村

屋基や木葉ふ舞の粒ありし 西岸

強城留別

抄一本ふふも葉 法らるる 乙児

別り村

法言ふ兄や抄る葉のふさき 吐序

身ゆふふさる村

手どとふ川中ふ落たり 綴序 去来

○留別夏之部

舟のふふ抄るしつとる 葉抄 去考

舟のふふ抄るしつとる 葉抄

花水含情唯力送子欲近」  
涼亭

葉柳金と出た時

昔しきと出た行くも柳子  
全

留別

風意とあしく小森と引ん  
軍文

州の古も経るる世と行

く昔の志をくく又母不替

序とあはれ旅立時とく

棠と雲ふり一とあきりや部公  
吐序

○留別秋之部

世枝送送るふあふ

物書了病心きしりく  
霜

送る書の送り来は木骨の  
空

唇の聲おあちくくの何百里  
支考

骨直ハ砧つと冬旅あはれも  
柳居

月の如涼鬼ハ浪ハあきり  
涼鬼

社中の今へ

い編くふそたてて退くや  
種甄 涼亭

○留別冬之部

い法さらハ雪ふふころか  
霜

涼川の草庵と出るとく

こ外らや涼ふとつ雪富士の山  
伴六

風り重くと吹ふとあ  
岩虎

尾注紙ハ海不動りく  
寒林

○贈 答春之部

い〜〜疲たる人のゆき文法ふすとく



と昔のしるかゝるに得ると是計の 宗啓

故の清直と概其の意あり

吾も違ふべしと雖も是れ其意 文富

志たしき友に

夫あゝるも女房も紅せん水程の 其角

髪にたかた人へ

松も急を居仕衣の友や為 冠子

見聞の事

水も又難ても下り申様う有 曲江

雪の道土を訪ふも遠路

為形も是れは流の世のくも 涼賢

流の極端に持ふ人より等

初家やまらねるも知恩院 暮方

公麻の羅發

るりくを彼岸にんみの見 全

岳の人の物本名と以て

を裁し

石もを楠かかてん木の身 吐傳

○贈 答 夏 之 部

果房を思ひまける人の許るは

涼しき差圖も名有り住居 翁

寄信の事也

年月のや鳴の浮葉を不らん 全

本言を言ふ事招き

小古まゝ家名を孫し

成りくといへる扇也 雲の 全

金羅透り毒と云ふは屋敷の金

経糸の品強や鼻 十ウ 毒 支考

拵及の毒手切り戒の世ふかす

又云ふや世とくしの條 毒雀 辛因

乃ち云ふ毒水小別

行速ふ毒や各あつたのふと 毒 全

人の訪ひ毒子ふ

決毒 毒一毒と云ふ名は毒 辛因

杜毒と云ふは毒

毒の世よ人ふは毒の毒と云ふ

吸毒 毒の毒と云ふ

松の毒一毒の風と云ふ 毒 毒

毒浪子

毒の毒の毒を料 毒 毒

毒の毒の毒を料 毒 毒

素陽 毒や先刺毒と云ふ 毒 全

毒と云ふは毒の毒と云ふ

二の毒 毒の毒の毒と云ふ

毒を保ふは毒の毒と云ふ

毒と云ふは毒の毒と云ふ

毒と云ふは毒の毒と云ふ

毒と云ふは毒の毒と云ふ

毒と云ふは毒の毒と云ふ

毒と云ふは毒の毒と云ふ

毒と云ふは毒の毒と云ふ

毒と云ふは毒の毒と云ふ

毒と云ふは毒の毒と云ふ

憐々結増空ふ似たり吐 螺 吐 月

或人の羅髮也

出山の結せありふ 結一り 亦 全

○贈 荅 秋 之 部

九月九日乙酉ク一掃せたる是喜喜小

峯の戸也日曇々之巻々葉の海 翁

初暈ふ中絶々々 庵や州の中 支考

やふいふあきさの百ふ海ひを

武士の紅髪ふふふ付 女とを 秋光女

昔接ある極仙屋を今

物洗ふ女ものかてをさあふ友 源解

昔藍の座の物ふはれけり

今ふあきハ

蕭蕭ふも乳房家きく家の月 全

源解の旅志りへをあつり

ゆふあといひやるやを

こち向けと髪を動かす髪りか 常因

波光輝師の暮りあふふ

隠きすむるも何々葉乃 宿 源解

深居せとひく

秋光中二夜ふゆりあふ 属 常光

旅よりふ縁縁何ふ物々

写士は是ぬ気何のそ寄の海 青藍

日光陽造管のり懸者や巻た

足々来まき月宮殿もりの山も 吐月

○贈 荅 冬 之 部

越人の方へて世すとい

二人見し雲へて来り降ける 鳥

井河のき人の多き世に流るるの心

雲と空と青師走の月舟を 空

尾ふ舟し人へ

控さる浮世をさるる政ゆるか 西羊

一匹家口人へ

冬知るぬ者や牡丹小舞 扇 常因

何うしん

菜の花や流るる世に火なき世 空

阿の僧と野ととむかへ

菜の早ぬ匠留や世の細代書 空

為之得沙の空子へ

成る屋の佛も多し冬木立 採條

十年と経て来男字と傍ふ

忘き世もあつた世ぬ者め聚る家 読巻

○ 題 詠 春 之 部

女子方の七種難世といふ

とけりも能く不づる 蘇 一 乃 甘 菊

性善の心と

杉と後世もあつたり 垣の 梅 沾 法

外 然 梅

は梅の属さきもあつた世の 月 採 條

おとりの下で世もあつたり 女の内 柳 尾

有公世と

世もあつたり 世もあつたり 水 車 採 條

を母の抱の波を修りたり  
香合の錦糸

喜風やけりも松の子と世家傳  
巖方  
紫苞蕉翁水満

雪や世にふかき如  
水  
空  
兔弾の跡を造りたるを屋下

雪不入るはおや  
雪の佐  
山  
空  
然々崎ふ松を足令

呼吸の巻里に  
松の  
今  
運の古ふを三井古の賢

然宮小呂の  
松の  
今  
佐  
佐佐木呂の松の

○題  
詠夏之部  
十八橋記

此何より  
脚ふ  
今  
松  
翁

互極了  
知も  
松  
今  
名  
空  
元  
元

一人  
松  
今  
松  
今  
名  
空  
元  
元

我  
松  
今  
松  
今  
名  
空  
元  
元

松  
今  
松  
今  
名  
空  
元  
元

松  
今  
松  
今  
名  
空  
元  
元

松  
今  
松  
今  
名  
空  
元  
元

善徳左衛門備前守

管下もろもろの形 備前 宋園

志戒の巻

改め承正世とや 玉名のは 西華

埋木を修りたる世の變ふ

まじりもや何と生も 翁 州 暮方

新紀玉川

玉川や景ありりハ志 水 比月

○題詠秋之部

女井の舞場せんと

草野や鼻の先あり 秋かき 其角

三男唯一公

蕭々や蔓一をくれと 後より 末尾

三笠山石筆二白

麻の軽らりりて石乃以 後 漆俵

墨のぬるもあし 中 麻の色 末尾

憐愛人

羨のふい人子仕きり 然 栄花

如是我少

福寿や二度目子 後 丸木橋 白階

三足猿

本と月の手ふ世活やく 中 猿 味俵

葉時世 福り 終ふ

暮きく 中 雲の 后ハ 歳むく 暮方

○題詠冬之部

終四絶道

枯芦中花をさくらく一  
水仙も引草いあかり  
物とまら申の人花石拵  
白子  
そのさや白と墨乃花をぬる  
子永

○題画春之部

画賛

山吹や宇治の焙炉の白ふ時  
酒の居る人の顔  
角もあくと酒のむ様うあ  
形跡の終  
吾柳の顔の襟や三の月  
甘角

石南

赤きりや子小口石南々々  
馬 道楽

西施の糸

海棠の枕をとりす花の  
猿左

和由海豊

雪の陰力の如く  
鬼士

摩多の蟹

後たを蟹み款を蛙り  
孫傳

赤西金剛

酔き人乃顔あつ山はる  
左

角代りたる妻の麻糸

袖あや角解したる妻の麻  
金糸

岩の怪

月と花の春のあそび 陸のあ みるを女

席上画燕

そらとらふ雲の移るや群 燕 玉水

老人と神の書小巻と

洛筆匣や移る系碗と字々存 二指

筆筆画

青柳や怒らぬときの美賢公 暮左

柳小半の画

呼ぶ半の森あぬ 柳の如 空

業平の賢

秋空のむら—小狐の月 空

狸の画

流系や汲ぬも船かた 空

賊本袋

此成りさすす人あ—世乃のけ 空

三島史

短しをむすの形から 空

道の途乃柳の画

清水も糸のそと柳の 空

左子賢

ふきまの髪兄—膝の弟の 兼文

山吹子煙

花小亭煙や水小位あゝら 吐月

陸子の賢

長束さや五方の現有人 吐月

○題画夏之部



菊ふささけの杜宇の画子

菊の息女の清くぬ 杜 翁 守武

蟹舟舟きの像

蟹舟舟きの河ふかんの後の 翁

菊 袋

菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画

菊子画

菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画

菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画

菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画

菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画

菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画 菊子画

菊子画

仕人画 仕人画 仕人画 仕人画 仕人画 仕人画 仕人画 仕人画 仕人画 仕人画

大黒

大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒

大黒

大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒

大黒

大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒

大黒

大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒

大黒

大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒

大黒

大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒 大黒

掛子画賛

雲とやつと有と若くは夏の雲 全

立像連唐

古くはや九年とらへて立像 全

松井梅の賛

高唐不若くは梅の厨の賛 北山

狂女の画子

屋石寺の夢の巻もなき巻子 康宗

○題 画秋之部

雲糸白画縁

古きらむけ糸も沸きたる巻子 翁

鉄骨

累ハミ家扇の骨也鉄の風 麦林

鬼

年とらむ掛もか田舎に終室し 鬼士

西川の画子

晴立と若形墨の袂々 那 原文

布袋月の掛きたる画子

指させたひひきす月の鏡 小 吐月

白虎画賛

掛のすハ白きと月の嵐 小 全

○題 画冬之部

舟の賛

多きと天宮舟舟の巻き外 翁

東坡

我々の思ひいかり雪の雪 其角

出山像

埋方早焼足きふ星むと 川 麦林

達磨

枯草小庵や跡しを池の免 空 一音

六哥仙

巨燧より二人河骨や 款 空 深修

菘子

蝶と此身爰ハ道程そ河極汁 空

小町縁

木も竹も皆と成りり小町のを 源文

獅子舞の歌

面白き木の葉の音や竹床月 夢を

○悼附 追善春之部

翁の百ヶり同子

雪跡 未款きの穀や梅の香 世枝

西上人の五不集忌小

木のきりとるゆ跡る様 一の 翁

免小集て一衣更美の香の 龍 支考

咽々く見せぬ氣ありき 露 冠子

手習の脚の身まうたふ小

飛び交きくつ怒く梅の香 足風

母刀自の刀きあり毎る小

忙然と只さる能法毒の 山 鬼山

案高一周忌

まごの竹もあき只巡るう 形 燒産

古父三十三曲

廻り来々髪鬘ふかき妻の氷 左

熊尾一周忌

一年の爰月のまゝ子去りぬ 策文

伴月集

人若く世ハ心ハ春の睦月 左 兼右

光登忌取歌

孫生ふも雪の室中 塚出 左

又村と伴

力なきふの端見たり 熊 左

六也其々妻と伴

とくまゝぬ水ハ冬ハ手雪 解 左 吐月

孫うせし村

手指の涅染ふ如たり 松 左

曲川伴

何事一物もあつた生る 浮春 左

追善

畑水の三千 禮や縁の先 六年

豊河併如く身まうあやう

志由子の消さふと悔し中

夫さうふ 物ふはうを

流雪やそれと雪さへぬる 袖 左

孫生十六の三田海海ちま

玉身六針あ指の遠忌いふ

まき法蓮あつてあり

あつてまき法蓮あつてあり 左

新雲の祥世を碑高すありけ  
下亡父の之由忘ひとるむ万里  
大一中生

新雲の何と申本末の家か多し 今

○悼 附 追善復之部

妹の追善ふ

身のうす息しき清く曇りふ 去身

赤ん子と共いきけり村

何く雲の山嵐とる西の雲り 外 荷守

赤の雲ふかきむき雲しる宮の雲 去身

吾と早く雲の才生りたるふ

水望月の桐の一葉とおのふあり 此水

面影の蚊帳の角に夕涼と 去身

思ふ人の才生りたると嘆て

がハ世あて移し旅さむ床 柱 久車

衣履と人よとたつ泪 子 遊女

正逢御車の知後尾よ去り

故のふ父と共い人といふ心

罪ふしき風も吹んぬ故きり 軒 曉光

吟詠ある蝶羅を以て美て

清く友跡きる友の 雲り 船 吐息

悼 弟 出 雲

舟の雲や散る新道り 家 少介 雲 笠

美仲奇跡父の願ハ芭蕉後り

左せ成被きて七と世の云ふ雲

と送迎ふ碑申うやう言生るる

色とくも形うけのひきき何し 嵐雪

翁の涙も結て

寝て伏しを紅あたる海 拭て 昔良

是子と生ひし村

蓮もや花の 咲くとおもひし子 翠岳

○悼 附追善秋之部

悼翁景

秋風ふりまき 翳しき 葉の枝 翁

母の喪ふおもひたる人

涙も散り 木の葉あきき 秋の暮 麦林

玉無才かまじし後

吾人の解はく 命し 秋の暮 玉角

孝下の妻才まかりしと夢て

森らき 夜やとへ 冷ゆ也 嵐 去春

悼少年二句

吾親を 知りぬ 吾子ハ 秋の 風 冬考

翳しき 中 藤木の 葉も 朽と ありて 帷座

曰

秋時を 守りきめ くと 暮 時 西 季吹

目業の ことん の 花も 泪の 水 秋 松風

麦林 師と といふ こと

登 蓬 丘 藤を けしき 翁 希 希 固

希 固 分 海 けしき 翁

坊 柳も 空 あり 何 けて 登 翁 の 上 涼 涼

九月 八日 笠 山 の 雲 分 暮 り 冬 不

雪 石 釣 ぬ 妻 小 村 ち きて 秋 暮 の 翁 全

月十三日 双飛也せ共分りて

人の親故 粟子むせふや 十三日 秋 左

甚く書きたりけり

とき 跡中針もさむり 能の由 策更

書固やいさむ

淡菴の友々わきり 便り 助 暮方

倅

寄たる 秋鳥ふ 粟子の 便り 曉臺

風子一周忌

去年 占ハ 法寺 海之 養氣 吐月

暮月 吾等 山の 分り たり

さしたる

おのひやう 一物 秋の 月 暮山

淡く 先達の 養う 秋更

廿三四 忌日

狭葉 中 味も 未めり 茶の 味 左

いさ けり 八 運の 存 身 不 自 の 者 と

一句 せ 跡 けり 泉下 の 泉 と あり

ゆふ 泉 池 居士 の 百ヶ日 管 たり

流 雲 雙 鳥 中 あり

おのひやう 一 月 曉 の 月 水 左 全

○ 悼 附 追 善 冬 之 部

ふ 集 せ 共 一 人 の 心 せ せ せ じ けり

埋 火 七 清 也 法 の よう 音 翁

将 翁 一 二 せ あり

あき 水 せ せ せ 隠 せ 也 枯 尾 音 甘 角

十月と暮を并り枯尾 云  
麻も春と入る洪しき 陸山 云  
力も中律と冷しく冬 籠 陸山

年の終世継の思ふは  
人の元へ申さる

淡雪ふりておる 先登 梅の香 古武

半も半のそ見ふたる 友手 春 妻の

縁是の姉は方まうりたる子 妻方

象時田人の時田と位取らる 妻方  
少集十八男とてむ 吐青

賦家と明む

氷ももろく 琴ももろく おもひ 分 全

係芳子と悼

降消々程片々 夢山 霜 霜山

○懐舊春之部

碑の目もあらしくと 梅の南 希因

露の香も花も香 深の香 深奥

萱料も鶴鳴ひし 詠やたれ 曲翠

塵ふおもひ 埃も 思ふ 梅子 妻林

双岡懐旧 人 曉春



琴空うき雲

形をかり油をく袖をさくものう 全

数豊川の源

縹の下をさへ惜む 董の春 源傳

芭蕉翁の像所

梅の書か 仰く翁の影中 子 軍更

おあ

雪霜小波ぬ祖師あり梅の花 暮方

ハナハ解る老祖父の子孫の業

也くもほけり多く死なれどとをり

形なきや

一竿ハ死装束也 玉角干 件六

高鉾

お川州也兵りのとものり翁の論 翁

旧庵を尋て

一梅ハ竹雲ハ隠しを友未 立 柳唇

空路み

唐高字のふりうき名物の書 長虹

去るゆのふりうき 名も友未 立 麦林

昔我兄弟の像

秋物の道も忘るに其 枯 州 源傳

懐師旧詠

名河ひしむしと今の涼 子 夕可

芭蕉翁像の書

朝夕の懐懐のうき 翁 子 暮方

巻懐

○懷舊秋之部

木外ら昔の荷ふははるきあり 夕

一笑う縁を訪ふ

堀も動けおら泣聲ハ秋の風 翁

冥冥の宵

かきんや胎甲の下のきりく 夕

或秋翁のふり思ひを

稲妻乃物ふとすぬ海ありあり 翁

父の歎せしと秋酒をたのむ

路の草をみ

兼出よ交ハ秋酒よ又意—— 妻行

任玄の古詩

夕見おの惟幕の世を後 翁 凍帯

秋翁の古詩

兼出とらふありれ落葉 撥 曉羞

半露の涙を

おのの昔お美人の泪いさうより 夕

○懷舊冬之部

人の居をみる

されハと持たきなき煙の霜の尾 翁

田里の人よ云々昔は

木枯の落葉お甲の山崎 夕 杖必

おる——

きぬのさうしと思ふ年の暮 除風

芭蕉塚

葉を吹く風報やとる冬木立 角上

友人のあきづきを

うきへては是れおとせしや女手

麦林

或人の時由忌子招き

的の事と翁おとせしや

軍文

世實忌

障子と妻の懼れ有り翁の

曉養

雲ハ時由鐘の世の威小伏

全

翁おとせしや御入多地云

全

○戀 春之部

紅梅中兄ぬきつる玉

翁

石女の雛くくく時表那家

翁

陸舟初の女史の情ひ

今よ共き

信ふと見よ如 初春の玉

全

おあ

世の昔や五年の翁の女とハ

石角

男ふ人よ時これ平地の官

翁

翁梅忌

振袖のあきと見たり翁の

世

翁入や翁のあきと見たり

其角

七種の中は翁の聲の梅も

全

志角

あきと見よ女手おとせし

全

と世

浮妙や 庵燈のよかり

全

春は時由御力智のゆき

喜の存方女と云ふ娘の形

出はる

傾城の路ありはは柳のふ

女のおとよりを真小句を

病を送るまゝ

云真小逸ても足るや物の深

幸公人の事小並てん

足らざるの事一と云

笑の端や傾城か梨の女市

物も中かゝる友あき老の意

李夫人

陽空の抱つけ生我う衣う如

湯雲妃

其風小常也ささたる森歌小

言士の意

柳のけ美人と抱し時れ何り

逢ぬ意

道のまら一狭と物め百歌小

如梅ハ娘任はる妻戸の

お梅やと逢縁思ひゆも

象を乗せし病を出よ

招引せし今任せ九理の

漏汲む方小似名や

意渡る様も小凝す泪う

待下と喜ぬ人を逢音小

是嘆くぬ身ハ静ある柳

左下

〇三十五

子代女

浪学

落雲

長門

墨女

玉梅

産平

杉風

吐月

暮方

揚州やみかく筆の片々〜  
 生限の袖誰より引令雛子の好  
 喜原一籠の垣乃外は節  
 家指差す猶中ま原も意の常  
 出代や片寄の和出乃鏡支  
 粥杖や梅籠〜と打をし  
 象より意ハ担ふ原り令まぬ水  
 か四杖のお伴〜と猶の意  
 里通ひかひより寄也籠  
 歩かぬぬ弊也まら古  
 男ひ何るを廊ふ原也  
 房〜とふ梅をまぬぬのま原外  
 山女  
 也有  
 極女  
 文質  
 篇軒  
 牛家  
 石介  
 護物  
 知是  
 雪山  
 我思  
 若翁

○戀 夏之部

眉をけと侍ふ〜とぬの云  
 行末ハ誰組ぬせんぬ乃を家  
 泣伏〜ぬぬい志あり汗拭ひ  
 井ふ髪洗ふ女ハ思ひも  
 か事ぬ法やありなり  
 顔何事よ清水と緑長髪のみ  
 其角

後叙

ちや怒〜吉原ゆ々妻 物  
 弟〜と一足姫を合や原 翁  
 夕顔み足と〜や分も〜と翁  
 西家  
 子乙女ふ是洗〜と嬉〜きよ 其角  
 河 原何〜と

多々家層小唄昔やらん

西施

昔あき極うらうら母うか 根人

夢在家

眉揮の寄りの荷子の白うら 巴風

法郎

きりくゆ解ゆりより杜宇 除局

侍意

侍意や法意なき程ハ故も衣也 妻奥

後程

静屋出く深新みえる 前せ小 長江 妻奥

宵くの静身も法なき水精外 若糸

君ハいぬ弱形何ありあきき 言尾

互業や静ふ令のも恥く 深補

袖く一や宵寐の静屋も月のさ 多代女

男無き寐覚ハくわき 桂法外 是嘆

出干やとるまの筆乃 珠 必苦妻

翠若床一多妻あり 和 秋色

枕花の小風と見ゆる紫り 奇 若写

静意占や物く燃て忍り 顔 杉候

我鳥や口ハ吸きぬ喜 鬼打 嵐雪

静公曉年と買せ事 一 全

虫干の眼も立捲 二つら 形 久澄

短歌を系ハ悉く一愛人幸り  
看子形見不承くき化旅外  
待文也櫻の障子をたぐ 昔  
芥子咲や思ひ寄の四り 道  
岸不秋の舟を流し一幸り  
人の恋此何し吹生を掃く 宛  
早乙女や恋も 古言身世田草外  
言目

○戀 秋之部  
今の久保田の居よ 片便 生 菊

飛城の山想より恋し 九月 冬 甘角  
大和路の女小物以て

依瀬女小枝のあきと思ひ免 全  
青山道より

誦子とるや心づくへ星ハきぬ 全  
二挺立の阪棹

髪とやぐ梳つ巻袖し 星乃 雲 全  
女未むのすくく舞の如  
あきよりとあけく

思ふ事おのりお思ふ小海へ 秋葉 全  
深居塔急

秋をより登程をのきと藤ぬ 秋外 菊号  
待急

之如殿と唐桑言く 石かろ 全

歌言出意

兼出よ我も忍びの累らき 以 謗水

奇楓然抱女

逢ぬ日ハ禿よんはる 紅 夢 亦 法 足

陸石然離別

沈澁の中よ別々 小 初 站 之 道

六宮粉黛無形

音響の福妻 時中や月の影 長 虹

おのれ程泣て月石 籬 亦 嵐 守

深か語り知るねと 柿の初 終り 亦 言 水

秋持て免竹たり 葉 の 亦 言 水

別遣ても秋の有夫ハ 站 亦 言 水

誰の方を思ふて 薄る 控筆の月 鬼 雲

英女若男 灯籠不 梅の 迷い 亦 其 角

更了月送り 度才ハ 女 亦 亦 且 葉

末ぬ人と 所不 煙ら せの 権の 亦 言 水

憂人と 又日 祝 見 九 終の 亦 去 葉

福妻おとの 能 海と 極り 亦 全 去 葉

思ひ始て 衣ハ 何 下 衣 水 の 月 亦 氷 花

星舎や 殿の 語 入 の 終 の 亦 亦 全 去 葉

只一樹 焦 甚 々 存 の 紅 葉 亦 亦 亦 子

朝顔や 糸ら 意 あり 下 垣 亦 亦 亦 亦

才の 應る 社 不 浮 名 亦 亦 亦 亦 亦

色穿つて 藤 亦 下 系 亦 亦 亦 亦 亦



物おののちをあるとて秋の風 燦碎  
 終末の啼きおれ物思ひ外 世因  
 信孫告思ひを葉の冬せ前 么英  
 油さしくつ藤ぬおら 乃 芳樹  
 夫と知り為小好の葉外 小喜女  
 長き秋や末ぬ人よりじ纏の敷 和及  
 さし是も月小服あふく細くは 山川  
 乞の川あきぬ思ひ限り取 庭英  
 犬啼ハのし屋外や 望乃 月 櫻川  
 秋葉や美し走き下程こゝろ 桂女 玉榮  
 松上や苔深小啼 積りの 徒 若深松  
 鬼灯や恋まき走き先 遠 米女

○戀冬之部

九のき依て蒲葉や雪を秋や清き 菊  
 名をく挿入こゝろ 踏 々 如 全  
 出口りて  
 後物小犬を拂うや 袖の雪 其角  
 破心  
 雪打や葉を返る小忘 衣 全  
 湯屋の卵面小竹の毛むくく 全  
 菊籠の通ひ遠在たり 菊籠ハ  
 鴨の毛や鶯鶯の寝の道ふはけ 全  
 人の妻あふたりし子  
 死号鶯の愛とあふ 鶯こふ 全

贈り物も未だ金銭も物の友  
 君も秋の月とそをわき本は  
 我り多も老りみの互古  
 妹の手ハ氣の足る小秋  
 小僧味形てあふらん  
 羨と念せと花つと  
 炭をわてと練し  
 思ひ羽ハ振てと未と  
 衣くと敷尼よと  
 小若流ふ余若と  
 物押し山巨燧と  
 罪と養子帯と引と  
 秋色  
 干那  
 護物  
 其角  
 全  
 小叢  
 花邊  
 曉里  
 冬松  
 李白  
 船散  
 晴費

縁末も法も思ひよと  
 岩黄ら小秋の  
 赤く意ハ較も  
 妙くや誰難  
 各各の保  
 才とよ  
 水の水  
 新き  
 賀春之部

一跡  
 若森  
 岩夕  
 大鵬  
 全  
 言  
 款川  
 樂世

羨のさる  
 位ふを  
 祝

有付ハ以く世に於りぬ其案あり 冬文  
荷号ハ四十の妻

築基と料を傳ふ見ゆる 外 壺五

家の案と建乃人ハ

巻り梅や接穂の末も芳しき 万子

可由ら妻をくらすふありと嘆て

孫ふ控く離れ侍ア一松の宿 涼傘

六十契

明六ツと子代の初の妻ハ 外 簾方

初産せん松子王母ハ新法 人 曉庭

七十契

子代傳ふ松ハ寝あり年 既 全

八十契

梅榊ハ十のうも、と 妻ハうん 全

可也ラ六をちせわく

笑うア耳唯ハ飲む酒を 涼傘

七十の初めふとわく

ハ絶頂も足ハけり 翠の曉 搦 全

名と松ハ人ハ

智の案も若と表の山道 外 軍吏

新之由松ハ十契

ありみゆる松より見れハ壺 外 全

四十契

妻の初老め返口らとあり 外 全

不才今ハ稀キヲ得シ是ニ杖 全

何人乃安小

行末也枕尔對馬ニ眉 全

澄路の亦其堂教原は妻

幼老尔亦れり也様一令

老の名と知る程芽ハ 枅 全

おあ

月世小程よき人ヤ 袖玉發 終年

曰

未々若小杖もたの事ぬ 齧 有書

杖ハ生々成ねと云程の初務り 蓮臺

一程也子代也か是よりの 豆 若地

老子八旬の契

善小自小ハ十歳ハ事々 杖此 全

全契一々程ハ亦の喜也

かくて後程ハ重杖乃喜也 全

深名氏藤雲小守百也契一令

老々程若深也杖の徳也 杖 全

魯公の羅髮也祝一令

老近の事ハ初々了 海 全 為山

近縁翁古様祝

老々信小齧ハ重子 杖 全

○賀夏之部 寫 終りたる人へ

屋敷も株も子で思ふか—き 許六

初て一年お母才まうけなう子

生の二人雛かう強へう機 点 法通

病後せやく

玉州の海も癒たり五月白 雙花

指のち病よりたそるせやく

思まぬあうくそおろし暢 本 涼亭

七十の老福せ智考も又

六十の翁あり 夢方

玉州や君と齡せたりるをん

里のぬれ紐母九十せ考く 寄公

○賀秋之部

名の弱弱りたる人へ

阿もど—紀たる字も萩考き 酒堂

家のぬらけり人をわく

おとや牡丹も袋り粒の宿 珠李

祝

子成の粒白ひも赤か—と赤考 亀洞

○賀冬之部

祝

先いそ松せあろ乃の冬 翁

何るあふ吸象座のあきるふ

音のあい花弾の道地—雲 柱 入芭

送雪の初孫の如きは

笑ふ世々く見れば山妻乃 男山 以月

如草といつるあふ野に春先を祝す

是れハ芽らむをわらわ冬以草 若山

( ) 祝詞附唱句法集春之部

体幣

何の本孫をともさぬ自ひ 外 翁

全

春海客也 和光の室のむら 外 許六

言さや 飛ふたき 櫻 一 外 希因

春梅と神

前ふ実も何うて 自生や 梅の香 柳水

麻呂

常より 瑞を委たり 後の世 源輝

熱田踏一

梅る香も 春の夢 宜し 留梅尔 曉春

聖一願有納

春の梅の一重も 林のむら 外 暮方

春原法乐

江にあゆみ 梅の香の 誓ふ 事 空

初午奉納

かき 春の梅も 是れを 外 世西

唱句文殊

梅の香と かなり 春の梅も 山中

全 涉 軒

今もその隈や魚は生 野 露 未了

全 池 上

八景の道者も出たり 萱 軒 木石

秀 取 社 院

踏の響き音一 梅 葉 了 旭 舟

麻 島 社 院

松杉も木葉も生る 中 法 久 山 左

法 富 宮

常や静よりあつたよ 鈴 の 音 雲 煙

法 手 洗

清き井も常 新 せうの 丸 二 橋

○ 全 夏 之 部

時 多 林 岳 の 中 を 通 り 翠 里 玄 雲

空 寺 の 灯 せ 法 久 家 山 津 外 飛 洞

破 扇 一 度 子 漏 ず 法 後 外 未 学

河 床 上 庭 中 生 生 不 法 狂 外 号 号

文 生 也 蒸 也 漏 了 々 林 々 路 麦 林

野 々 園

涼しき 和 族 の 漏 き も 雲 の 下 涼 城

不 二 橋

あうりり 安し 々 後 の 不 二 橋 暮 古

江 の 崎

橋 涼し 波 引 舟 々 歩 渡 り 吐 舟

○全秋之部

玉津島

霧の白く衣通服う素肌呈出 素堂

加茂小詣

月かけや梅ももぎ穂あり 上 史邦

神田祭

雲はさき大名衆せまわりり 取 虎堂

菅神

一面や月も夜何とそ 初 卯堂

松も何れも南枝の梅 操 梅路

右衛門尉

浪も流るる砂雪や滴り多 涼 涼亭

柱立男山王

雪の手に結何とたふ涼くも清水 吐 吐亭

○全冬之部

熱田の湯廷宮何りて

麿堂屋鏡も清く雪の玉形 初 翁

のち家を初

雪知ぬ芥も妙あり 神 神楽 利重

美神

袖は皆渡理の形や冬の梅 幸 幸梅

卒もとくむるは雪吹く陣

たるとは清神もまうた

ふ髪の雛も木も雪の年の暮 涼 涼亭



愛神

松子不思義の跡了 後 爲 氏 秀 橘

麻 崎 小 令

ぬ 木 法 華 小 法 華 也 乞 了 義 引 若 夫

○ 雜 部

近 際 不 雜 産 何 り 寧 ろ 之 々

つ 乃 屋 小 の 名 ん 々

摩 訶 羅 若 夫 之 美 女 乃 亦 特 引 宗 祿

深 川 若 夫 ち 小 塚 也 之 乃 死

若 乃 之 乃 之 事 小

世 乃 中 小 法 之 小 宗 祿 乃 當 り 引 翁

若 乃 若 引

小 乃 亦 之 杖 突 坂 也 後 了 引 全

若 乃 若 引

於 此 之 神 乃 祿 森 乃 乃 引 引 全

若 乃 若 引 之 乃 乃 引 引 引

若 乃 若 引 之 乃 乃 引 引 引 引 引

之 乃 若 引 之 乃 乃 引 引 引

若 乃 若 引 之 乃 乃 引 引 引

若 乃 若 引 之 乃 乃 引 引 引 引 引

若 乃 若 引 之 乃 乃 引 引 引

若 乃 若 引 之 乃 乃 引 引 引 引 引

若 乃 若 引 之 乃 乃 引 引 引

若 乃 若 引 之 乃 乃 引 引 引 引 引

若 乃 若 引 之 乃 乃 引 引 引

若 乃 若 引 之 乃 乃 引 引 引

若 乃 若 引 之 乃 乃 引 引 引

若 乃 若 引 之 乃 乃 引 引 引

龍力甲意らるる時不啼もせは 乙州

四十二歌

二輝とまむ心の自悟 一か 新炭

元禄七年の夜

たせ我翁のふきと足送り

まねる小餅屋の店はあゝか 首号

武蔵法師のふらりか

寺か事やし今中く宮の衣川 南雲

俱利伽羅峠の翁塚

をねしと

今更なるも孫か了しとむ塚のみ事 素子

以上

○ 卷句案方之事

祇翁曰句ハ意念相のうちハ一念と執事是と  
起下ハ意念相ハ物中ハ一物ありとむるハ時  
勢ハ公月雲と執向起る是ハ自由の内外とを  
え今ハ意念と定め句とあるあり

○ 序歌曲の事

元<sup>一題</sup>ハ小<sup>一序</sup>田<sup>一序</sup>毎<sup>一序</sup>のり<sup>一序</sup>と<sup>一序</sup>特<sup>一序</sup>意<sup>一序</sup>ハ<sup>一序</sup>は<sup>一序</sup>也

秋<sup>一題</sup>の秋<sup>一序</sup>と<sup>一序</sup>お<sup>一序</sup>常<sup>一序</sup>ハ<sup>一序</sup>た<sup>一序</sup>り<sup>一序</sup>吐<sup>一序</sup>ハ<sup>一序</sup>ら<sup>一序</sup>か

猶小田序ハものまゝハあハて元日の月の田  
毎と思ハるる後ハハと終意ハけと曲と

求めた方の境ふ欠たるものハ甚句といふ  
わらび

○連聲普通の事

アイウエヲ	ハヒフヘホ
カキリケコ	マミムメモ
サシスセソ	ヤイユエヨ
タチツテト	ラリルレロ
ナニヌ子ノ	ワ井ウエオ

○連聲の親句

えりや<sup>ヤ</sup>い<sup>イ</sup>き<sup>キ</sup>く<sup>ク</sup>雀<sup>セ</sup>の<sup>ノ</sup>物<sup>モノ</sup>かたり

○普通の親句

阿<sup>ア</sup>涼<sup>リョウ</sup>一<sup>カ</sup>麻<sup>マ</sup>島<sup>シマ</sup>の<sup>ノ</sup>海<sup>ウミ</sup>の<sup>ノ</sup>筈<sup>ハコ</sup>小<sup>コ</sup>松<sup>マツ</sup>

○正親句

初<sup>ハ</sup>午<sup>ノ</sup>也<sup>ヤ</sup>田<sup>ノ</sup>有<sup>リ</sup>細<sup>カ</sup>糸<sup>ノ</sup>辨<sup>ハ</sup>法<sup>カ</sup>也<sup>ナリ</sup>  
方<sup>ハ</sup>在<sup>リ</sup>納<sup>メ</sup>新<sup>ニ</sup>室<sup>ニ</sup>小<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>契<sup>ノ</sup>素<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>結<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>より  
句<sup>ハ</sup>抄<sup>リ</sup>多<sup>ク</sup>一<sup>ト</sup>程<sup>ノ</sup>疎<sup>ク</sup>句<sup>ハ</sup>親<sup>ク</sup>句<sup>ハ</sup>小<sup>キ</sup>き<sup>キ</sup>法<sup>ノ</sup>多<sup>ク</sup>り<sup>ト</sup>い<sup>フ</sup>  
事<sup>ハ</sup>終<sup>ル</sup>知<sup>ル</sup>べ<sup>ク</sup>一<sup>ト</sup>連<sup>シ</sup>聲<sup>ノ</sup>普<sup>通</sup>ノ<sup>ノ</sup>作<sup>ル</sup>者<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>句<sup>ハ</sup>  
小<sup>キ</sup>有<sup>リ</sup>べ<sup>ク</sup>

○虚実正の例

虚	糸切 <sup>キ</sup> を <sup>キ</sup> 雲 <sup>ノ</sup> と <sup>ト</sup> あり <sup>キ</sup> なり	風
実	糸切 <sup>キ</sup> を <sup>キ</sup> 雲 <sup>ノ</sup> と <sup>ト</sup> あり <sup>キ</sup> なり	風
正	糸切 <sup>キ</sup> を <sup>キ</sup> 雲 <sup>ノ</sup> より <sup>ヨリ</sup> あり <sup>キ</sup> なり	風

右俳句の甚句其小虚実の旨也其を正  
風律といふあり

○伝傳

今ハトテ完明留止き月の抄子  
第不ぬりてし色香の羽子

○姿の傳

沙の傳統とも不  
姿をきときらか

姿 無 無 姿  
年の尾や鮭の尻ハ味ハ伝舞  
年の尾や尻の方ハ味ハ伝舞  
沙とまくののど 祢も味き草ん  
沙をゆくをど 祢も味き草ん

一篇 鼻月言々<sup>一篇</sup> 梅山の花<sup>一篇</sup> くらき花

一曲 おね流りあつても 鳴りこもるこもる

(一)五品の傳五体共云

香

舟の香や 芳き柳の及ふ赤

芳き

蓮葉不波 花や 侍路の物候り

家り

塩鯛の歯久きも 草一葉の香

梅り

末うらむて 茶摘も 吟草 首 魂

志

煙と空も 消る 涙の香も 赤 香

○八體曲云

古他や 蛙飛 近む 三川の音

人も足ぬ妻也 遠くらの山に  
花を死ぬ気色を足へて輝の影

○有心

香原の松乃古きよ冬末幾里  
梅の末の程屋や木や梅の香  
猿引の猿は小袖をきぬく

○無心

赤くともいふ法を交くも秋の風  
雪如く霜かす法や花の香  
甚原や兵ともり 爰 乃 終

○悠遠

百魂きへ形方や 爰 却て川

六月長閑なる雲をく 嵐 山  
梅々香小のつと口紅歩の山は

○風艶

象沼のやや 西橋のむすの香  
蝶舞の片香ふはむ 影 爰  
却て橋くとも程をたぬ 如命

○寓言

道端の小橋の写り 咲きけり  
きのふも花と咲く 是れこそ  
雲折し人を休むる 月 影 外

○風情

いほきくも雪見も 蝶も雲も

五月五日を集めくあり客上川  
縁細ふ人を反逆の枝おりのを

○風曲

ゆり 羨の居家之東 此妻縁  
書くても多しきものや 産くし

系 漢も子兒の産み 七兵衛

右十体三十体あり 云あり古来作書子有古相是  
をつめく又併八併ふ 法也と云は右翁の引句之

夫從細の語句句と成と云は併ふ用四方所の切字の法  
ふも何うは只一句の四言産の産横はる 夫終厚年不  
下横の合らぬめの産の之産横具是し今昔句體あ  
り其上歌の系物迹き 採不仕立る句詳たたるを

「大<sup>一序</sup>も<sup>一敬</sup>動く<sup>一急</sup>世あり 輝の聲

此動の中ありと入たる所にて 産句不あり

「大<sup>一序</sup>も<sup>一敬</sup>あり<sup>一急</sup>今<sup>一急</sup>鳴<sup>一急</sup>や 輝<sup>一急</sup>此<sup>一急</sup>聲

と此書六横あり 故平句あり

「松<sup>一序</sup>高<sup>一敬</sup>や<sup>一急</sup>と<sup>一急</sup>産<sup>一急</sup>も<sup>一急</sup>左<sup>一急</sup>や<sup>一急</sup>く<sup>一急</sup>産<sup>一急</sup>あり<sup>一急</sup>今

と一<sup>一序</sup>と<sup>一敬</sup>六<sup>一急</sup>何<sup>一急</sup>産<sup>一急</sup>の<sup>一急</sup>名<sup>一急</sup>所<sup>一急</sup>を<sup>一急</sup>産<sup>一急</sup>て<sup>一急</sup>も<sup>一急</sup>同<sup>一急</sup>し<sup>一急</sup>今<sup>一急</sup>産<sup>一急</sup>六<sup>一急</sup>松<sup>一急</sup>高<sup>一急</sup>  
の<sup>一急</sup>書<sup>一急</sup>ら<sup>一急</sup>産<sup>一急</sup>か<sup>一急</sup>く<sup>一急</sup>と<sup>一急</sup>也<sup>一急</sup>と<sup>一急</sup>産<sup>一急</sup>完<sup>一急</sup>昔<sup>一急</sup>昔<sup>一急</sup>の<sup>一急</sup>采<sup>一急</sup>ら<sup>一急</sup>に<sup>一急</sup>は<sup>一急</sup>あり<sup>一急</sup>今

「松<sup>一序</sup>高<sup>一敬</sup>や<sup>一急</sup>不<sup>一急</sup>き<sup>一急</sup>句<sup>一急</sup>く<sup>一急</sup>不<sup>一急</sup>産<sup>一急</sup>あり<sup>一急</sup>今

と此書六八八高の取平小と今ら小し今 産<sup>一急</sup>昔<sup>一急</sup>昔<sup>一急</sup>  
句<sup>一急</sup>不<sup>一急</sup>あり<sup>一急</sup>へ<sup>一急</sup>今<sup>一急</sup>不<sup>一急</sup>き<sup>一急</sup>句<sup>一急</sup>く<sup>一急</sup>産<sup>一急</sup>之<sup>一急</sup>破<sup>一急</sup>之<sup>一急</sup>曲<sup>一急</sup>之<sup>一急</sup>言<sup>一急</sup>産<sup>一急</sup>の中<sup>一急</sup>の<sup>一急</sup>  
換<sup>一急</sup>抄<sup>一急</sup>と<sup>一急</sup>あり<sup>一急</sup>之<sup>一急</sup>此<sup>一急</sup>外<sup>一急</sup>の<sup>一急</sup>産<sup>一急</sup>方<sup>一急</sup>化<sup>一急</sup>の<sup>一急</sup>昔<sup>一急</sup>句<sup>一急</sup>も<sup>一急</sup>此<sup>一急</sup>む<sup>一急</sup>抄<sup>一急</sup>不

少くもなるべし

着想の會少の差とのふ字せきらふ上の句は時  
表八句あり中の句は時表七句あり百類の時  
九句あり惣して昔句のふか不録持あるは古  
いふはししを踏まぐ下勿論句は死活といふ  
とあり

○其角の中云々

山つららと表ふ名の阿りく死  
山つららと表ふ名の附く活

○千代り句

死魚や阿を清く古の秘ありや死  
死魚や阿を清く古の秘ありや死

○五服之事

空豆は花咲ふあり表は縁り赤添

空の水鶏乃老る深川

忘るふよ阿は蟬啼空乃空 相對

松乃茂みをかえり三月月

換持ふの眼あり

泣き聲も持て婦り新に表は

悔乃古菜なき空くは啼

常や一聲啼てあきらむ向む

以苗 垣根ふ松の空く嘆 以

常月や清の流りて並ひ居る

冬の新白乃表は時里あり

右方の旭の表と以て事と見出さるるの年相と  
思つた初心かと用替る

○又顔徳の脈と以て

重ゆ 何ゆに残る事あり 此柳子  
江小 句るかへ事と多の影

○一以貫之

若くは天の照ハ地あり才三人道之元末天他人の三  
才をて建事したる事之内相相若くハ何様の事の出  
るも初るはそりくと出ることのありぬるやを止る  
照ハ若くは才をてつと換替ふ付るもの故地ハ新子  
しと勤る民才三ハ道あり故事亦波留る事とす之故  
句は亭の如く句は之換替る是の如くあり

此五の脈解ありとも梅本五語も皆はむを自  
地と出来たるを踏より名目せ付たるあり

若く 大おも初る、やうと 暗の聲  
脈 派と水と 派と藤乃事

梅 咲ぬ 松山里と 思ふあり  
公の 母あり人 誰か 以

○茅三の事

才三ハ人及事ハとて 手亦 兼ふ 道之 出 示 於 葉  
とむるハ 書て 一切の かな 結 物 名 あり  
右の 律け

出示於葉 ナンジニハライクサ  
シムノコロナリ



み字留才三

○文字留才三の序

身とめし陸の花車

雅波  
二百篇  
西野

今之件は祖翁深密の因と法蓮平  
志し阿の者ふある事し也と  
新し記し意きぬ

新撰 俳句七百題の巻尾

明治廿年十月廿八日出版御届  
全 年十二月刺成

編輯人

東京府平民

伊藤新三郎

日本橋区新右門町  
十二番地

出版人

同府平民

高木和助

全區鉄炮町廿五番地

